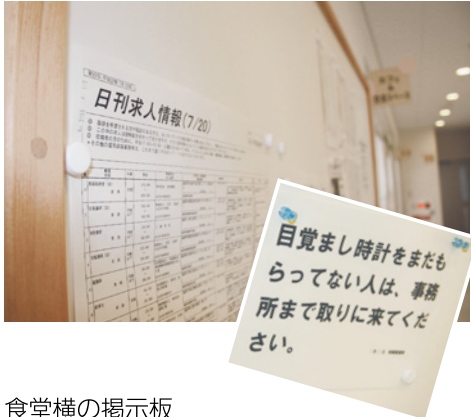


新しい生活へ向かって 少しずつ準備をはじめています

—抱樸館福岡 開所から3カ月—

ホームレス問題を考える 18



食堂横の掲示版
日々更新される求人情報やさまざまなお知らせ。
利用者にとってどれも大事な情報だ

多くの団体が視察に訪れ、行政やマスコミの注目を集めている抱樸館福岡。館長の青木さんをはじめスタッフは、その対応に奔走しながらも細やかなケアと将来を見据えた支援のため利用者に向きあう日々を送っている。

食堂に面した日当たりのよいテラスにはさまざまな人から提供された就職活動用のスーツがずらりと虫干しされ、出番を待っている。昼食を終えた利用者たちが集まり、これからはじまる新しい生活の話をする。そこへスタッフも加わり、名前を呼びあい冗談を交わす。家族のような温かい視点で利用者に向きあっているスタッフの姿勢が、自立に向けてのサポートの柱になる。

抱樸館福岡で人とのつながりをもっと一度実感しながら、利用者へ新しいスタートを切った。

グリーンコープのホームレス支援の拠点「抱樸館福岡」が5月1日に開所して、3カ月が過ぎました。これまでの利用者は53人。家族との絆を絶たれ、厳しい現実に向きあってきた人々が、新しい生活をめざすため少しずつ動きはじめています。利用者とスタッフに話を聞きました。

みんなの声

若い人も一緒に、励ましあっていきたい

3年くらい路上にいました。広島や大阪でも働いた。日雇いの仕事があるうちはまだよかったけど、その仕事もなくなったらもうどうにもならんようになって、毎日もう限界だと思って過ごしてきました。

北九州におった時、勝山公園の炊き出しに行きました。そこで奥田さん(NPO法人北九州ホームレス支援機構理事長)に会いました。北九州ではどうにも仕事が見つからんし、仲間から「博多に行ったら仕事がある」と聞いて福岡市に来ました。でも、なかった。おにぎりとか食べものを探すのが大変でした。おにぎり3個ももらうために春日市まで自転車でいった時、チリチリが配られて、それに北九州で会った奥田さんが載ってたからびっくりしました。それでここに来ようと思いました。

ここで、三食食べさせてもらって、やっとな憲法25条にある「健康で文化的な生活」っていうのを実感しています。幸せですよ。

私はもうこんな年やけど、ここにいる若い人は、頑張らいたいもたくさん経験しているから、なんとか頑張らしてほしい。同じ境遇におったから、気持ちが分かるんです。

ここを出ることになったら、それはそれで覚悟して暮らしていきます。昔のことを考えると後悔もあるけど、そんなこと考えてもどうにもならん。割り切って前を見ていくしかありません。

みんなに会いに？ もちろん来ますよ。ここは自分にとってふるさとみたいなもんですからね。

～Yさん(67歳)～

新しい生活をめざして資格を取ります

まさか自分がホームレスになるなんて全然思っていなかった。路上に出たのは3週間くらいです。短期の仕事が続いてたけど、やがてそれもなくなりその後、派遣会社から携帯電話の修理の仕事を紹介されました。でも3カ月くらいしたら派遣切りに。長く勤めている人は技術だからと、すぐに解雇されました。

しばらくはインターネットカフェに泊まり、その時はまだ「なんとかなる」と楽観してました。新しい会社を見つけて「採用についての関係書類を送ります」と言われても、送る先住所がないから自分で「もういいです」と言わなきゃいけない。それがつかかった。途方に暮れていたら、声をかけてくれた人がいて、その人のすすめで区役所に相談に行ったら抱樸館のことを知りました。ここでなんとか立ち直りたいと思ったんです。

人の世話をするのが好きで、高校生の頃ボランティア活動で高齢者施設を訪ね、職員に「あなたが来るといつも笑った。それで僕は介護の仕事しようと思いました。」

明日から福岡市の「ホームヘルパー2級講座」を受けに行きます。抱樸館に来なかつたら、自分がこんな講座を受けられるのも知らなかつたと思えます。暑いけど自転車で片道40分くらいかけて通います。資格が取れるのが何よりうれしい。せっかくだからチャンスを活かして頑張ります。

～Sさん(41歳)～



競争社会や格差社会といった現在の社会構造に疑問を抱いてきました。昨年、勝山公園(北九州市)の炊き出しに参加し、年末の厳しい寒さの中スタッフを手伝いながら、なぜか心は温



相談員 小畑 孝仁さん

「皆どこに行つたのさ？」「皆どこ先はあるのさ？」と聞いてました。社会の制度と困っている人をつなぐ仕事をしたいです。利用者の方に「話をしつづけてほしい」と言われることが一番うれしい。私もたくさんの方と話をしながら、実は勇気をもらっています。



相談員 木尾 春菜さん

スタッフ紹介

抱樸館のあらゆる分野とつながるホームレスに関わる仕事をしたいと相談員になりました。学生時代、福祉実習をきっかけに「夜回り」のことを知り、参加したことがあります。小雨が降る夜に「雨に濡れないところに行きませんか？」と声をかけたら、その人は「周りの人に迷惑をかけるから自分はこの方がいい」と、その場を動かさなかった。それがすごくショックでした。炊き出しに行くとき、あまりにたくさんの方が集まってきたのでびびりしましたが、終わるとあつという間にいなくなつてしまふ。「皆どこに行つたのさ？」と聞いてました。社会の制度と困っている人をつなぐ仕事をしたいです。利用者の方に「話をしつづけてほしい」と言われることが一番うれしい。私もたくさんの方と話をしながら、実は勇気をもらっています。



相談員 西川 寿美礼さん

これまでは、ホームレスの問題と自分を結びつけることなんて全然できなかった。でも今は、こんなに身近な問題なのに、と思えます。どこの街に出ても、やっぱり路上生活者のようすが気になります。

「この荷物は何だの？」「とか、「支援のこと知ってるかな」とか。逆に考えると今まで気付かず通り過ぎていたということです。相談員として相手を信じ、伝えたいことは山ほどありますが、いままさに分かっています。5年後10年後に分かたつたらどうなんでしょうか。うれしいと思っています。

言葉で表されることだけでなく、利用者みなさんの気持ちを察することができるといいなと思います。